

明德義塾中学校・高等学校

新シリーズ：「International Boarding School」で学ぶ 第2回

第2言語・継承言語としての日本語

広報入試部長 高橋 聖

北米の現地校・日本人学校で学ぶ中学、高校生のための「ジャパンサマースクール」が昨年に引き続き、また「1年間留学プログラム」が新しく今年からスタートします。今回は両プログラム誕生のきっかけとなった第2言語・継承言語としての日本語教育に対する本校の取組をご紹介します。

19年の歴史を持つ日本語教育

明德義塾では、日本人海外子女を対象とした継承言語としての日本語教育に取り組むより先に、海外からの留学生を対象とした第2言語としての日本語教育を平成3年4月よりスタートさせていました。当初は韓国からの留学生を中心とし、モンゴルからのスポーツ留学、そして姉妹校があるカナダ、オーストラリアなどの短期留学生の受入を行っていました。その後、中国の生徒が加わり、ここ近年では、タイ、ベトナム、インドネシア、台湾、セネガル、アンゴラなど11の国と地域からの留学生を受け入れて第2言語としての日本語教育を行っています。

多様な言語背景を持つ生徒に対し、初歩からの日本語指導を行う上で壁となるのはやはり漢字の習得です。

日本語指導は習熟度別のクラスに分けて行いますが、韓国や中国の漢字圏の生徒と比べ、非漢字圏の生徒がより一層の努力を強いられることは明らかです。

さて、教室の中で非漢字圏の自分1人だけが漢字でつまづいているのと、自分以外の非漢字圏の生徒も一緒に躓いているのでは心の持ちよう、漢字に取り組む心のゆとりが大きく違ってきます。更に、2人の内のどちらかが努力し、漢字の壁を越えようとするならば、あとの1人も非漢字圏出身であることを嘆く日々を無駄に過ごすことなく、共に努力をするのではないかと思います。

明德義塾の「日本語コース」の特色は、生徒が漢字圏、非漢字圏に偏ることなく、言語圏を越えてお互いに切磋琢磨出来る環境にあることだと思います。

第2言語と継承言語

日本語コースにおいて、第2言語としての日本語教育をスタートさせていた我校ですが、日本語コースの看板を出しているが故に、日本語が不得意な海外からの日本国籍を持つ生徒の入学希望者が徐々に目立つようになりました。実はその段階では継承言語としての日本語教育に対する指導は国語科の中での対応に限られていました。全く日本語ができない生徒に対する指導と、基本的な日本語の文法と日常会話の力を持って入学してくる生徒、一見日本人と同じ日本語力を持つ生徒に対する指導のどちらが難しいかなど疑問も少ない時期が1年ほどあったことは否めません。

結果難しいのは継承言語としての日本語指導を必要としている生徒だったのです。

継承言語としての日本語教育

確かに第二言語として日本語を指導する上でも「漢字圏・非漢字圏問題」は存在します。

然しながら、継承言語としての日本語指導にはそれ以上の困難が潜んでいました。

日本語学習歴、日本語能力と学年、年齢がリンクしない。特定の教科の特定の単元における学習言語が日本語で獲得されていない。日本語学習に対する意欲、考え方がしっかりしていないケースが見受けられる。など、日本語の習得と言う、学習に対する明確な目的意識を持つ留学生に対しての第2言語として平仮名、カタカナ、文法などを一律に指導するのは異なり、継承言語指導には個々の生徒の日本語力を含む学力全般に配慮し指導する必要がある、既存の指導の枠組みでは到底対応できない問題を内包していたことに気づかされる事となります。



民族衣装の留学生、校長先生と一緒に